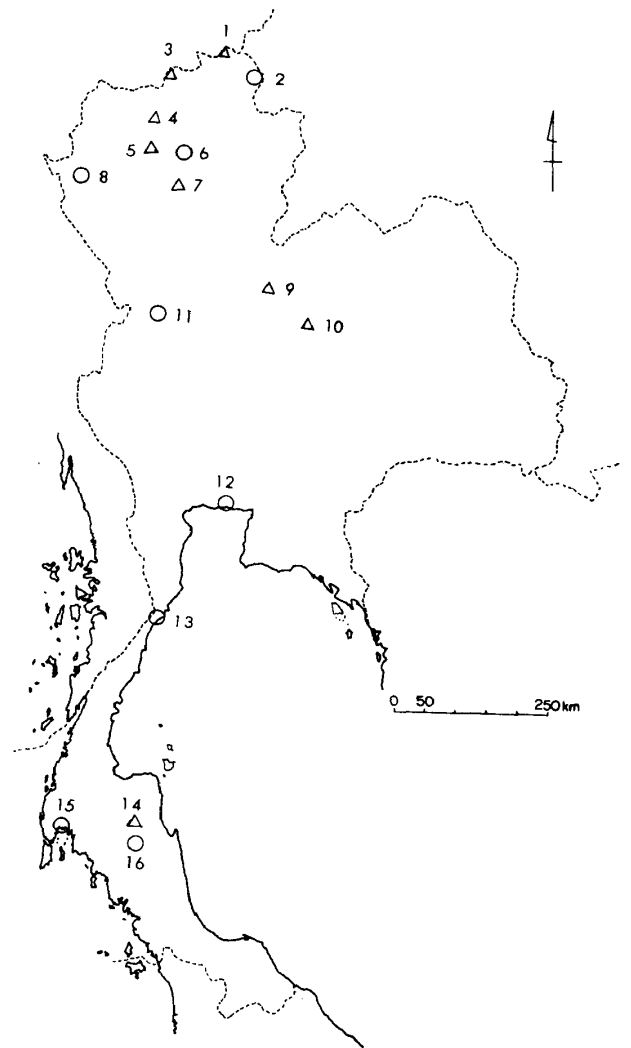


タイ国植物調査記

福岡 誠 行

再び訪れることになったタイ国は雨期の盛りであった。その降り方は予想に反して、日本の梅雨期のように何日も降り続く。このため私達の野外調査も思っていたほど楽なものではなかった。

雨の中の調査はお役所との折衝に当たられた芦田先生、自動車事故でバンコクに残ることを予儀なくされた田川先生と上野氏を除いてまず半島部へ向かう。限られた時間内にできるだけ能率を上げるため3班に分かれてそれぞれ別行動をとる。一組は淡水藻類を求めて Songkhla まで往復 3000 km のドライブを1週間でされた平野先生、もう一組は前回多くの興味ある植物を採集できた Khao Luang へ再び登り、残る一組は清水氏を中心に石灰岩地帯の植物相の調査に当たる。私の参加した石灰岩チームは8月17日ビルマの国境とタイ湾にはさまれタイ国が東西に最も狭くなった所にある Huay Yang 周辺で活動を開始する。宿舎は浜辺にあり砂浜を洗う波音が静かに聞えてくるし、日の出る頃には虫の声もコーラスに加わる。ここは静かなだけにまた不便なところで食事をするにも 50 km 離れた Bang Saphan まで出向かなければならない。ただ、舗装された道路がほとんど一直



タイ国調査地

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 Doi Tung | 2 Chiang Khong |
| 3 Doi Pha Hom Pok | 4 Doi Chiang Dao |
| 5 Doi Suthep | 6 Huay Tak |
| 7 Doi Kun Than | 8 Mae Sariang |
| 9 Phu Miang | 10 Phu Kradung |
| 11 Lang Sang 国立公園 | |
| 12 Samui Prakan | 13 Huay Yang |
| 14 Khao Luang | 15 Phangnga |
| 16 Thung Song | |

線に続いていてそのうえ車が少ないから日本とは事情が異なる。時速 100km で突走って30分後には食事がありつける。しかし夕食に費やされる2時間は仕事が全く中断されてしまうだけに痛かった。毎晩採集品を新聞紙に挟むだけで真夜中までかかり、さらに翌日ま

でもちこしたこともたびたびあった。この間、標本の乾燥もしなければならぬ。乾燥は段ボールに標本を挟み、下からラジューズである加熱乾燥である。時々ラジューズのポンプを押さないと能率は著しく低下するし、逆に火が強すぎると標本が焦げたり燃えたりする。タイの人にまかせて2度ばかり火事を起こしてしまった。順調にゆけば早いもので2時間、遅いものでも2日あれば乾き上がる。それでも収穫の多い時はタバコを吸う暇もないほどの忙しさである。

Huay Yang 付近でひとときわ高い Khao Luang は 1494 m の頂上をビルマ国内に突き出している。遠くから眺めながら「登りたい」を連発したものである。この山の麓はおそまつながら観光地となっていて入口に茶店があり川に沿って薄暗い熱帯降雨林の中を迂回路が走っている。この道をそれて花崗岩の重なり合っている川底を進むと花崗岩の一枚岩にはばまれる。岩の上にはい上がると可憐な草花が咲き乱れている。熱帯では草本性植物に適した向陽地は少ない。このように大岩の上とか砂浜のように樹木の侵入できない土壌条件の所や山地民によって行なわれた焼畑の跡にしか草原ないしは草本性群落は発達しない。

さらに南下した Phangnga 付近は年間降雨量の最も多い地域の一つでゴムの植林も盛んである。雨量が多いだけに植物相も豊富で、Craib らによって記載された新種の原産地 type locality としても有名な所である。原産地の調査はこれからの研究にとって欠くことのできない基礎資料となるから未調査地域における採集とは違った意味の重要さがある。このあたりはそそり立った石灰岩の丘が見渡す限り重なり合っている。これらの岩山へ分け入ってみると、湿潤な森林の発達した所、比較的乾燥した山といったように同じ石灰岩から成り立っていても植生は変化に富んでいる。この付近には植物学者はもちろんのこと

現地の人達も分け入ったことのない丘が数えきれないほどある。道がない上に水が加わって、すぐ目の前の山にすら取り着くことができない。こんなありさまではタイ国植物相を明らかにしようとする私達の願いもどこまで達し得るか心もとない。

Phangnga の海岸には石灰岩の小島が多いとのことなので Phuket 島行きを変更して海へ出る。海面からそびえ立っている石灰岩の大絶壁からボートのエンジンの音がはねかえってくる。この音に驚いたのか森の中では野猿の群が騒いでいる。望遠鏡でのぞくと猿とともに沢山の花が視野に入ってくる。しかし、ボートを岸壁に近づけると花は20mも頭上にあり採集することができないことが常である。

マングローブの中を迂回しながら森の中へ入ると良く繁茂しているわりには採集品は少ない。Wallace の指摘にもあるように、日の光が良く当たる樹冠では花が咲き実がなっているのに陽光の届かない林床には花が少ない。それでは向陽の地へと一塊の岩からなる小島に上陸。着生ラン、キツネノマゴ科、イワタバコ科などの植物が多い。この海に突き出た石灰岩の上にも蟻が多く、樹木を採集するさい油断すると手といわず首といわずかみつかれる。

海岸での一日を最後に Phangnga 周辺の調査を切り上げ Thung Song へ行く。ここ



写真1 Phangnga の海岸

は Khao Luang のちょうど南に位置しているが植物相は予期していたほどおもしろいものではなかった。というよりおもしろい地域へ入り込めなかったのかも知れない。すぐ目の前にある山も連日の雨で近づくこともできない。ただ1本あるという道も水びたしとなった草原の中を通っているのではいたしかたない。ヒルの泳いでいる沼沢の中でウツボカズラやミミカキグサ属2〜3種などを手に入れ引き返す。

不案内な上に適当な地図もなく猟場を求めてジープを乗り回す。山頂に無線中継所があり頂上まで車道があると聞いて出掛けるが、せっかくの道路も許可が必要だという。日曜日のこととて係の人がいるはずもない。だが歩いて登るのはかまわないとのこと。せっかく来たのだからと細かくくだった石灰石で舗装された道路を歩く。先日のドライブの疲れと直射日光に痛めつけられ途中でへたばる。車一つ通らない道路だから石灰石のじゅうたんの上で寝そべっても何の心配もない。

このようにして山野をかけめぐった南部の旅も Thung Song 周辺での2日間の調査を最後に切りあげる。この間到達し得た最高高度は250mに過ぎない。しかし、前回おざなりにしていた平地での資料収集ができたから、まずまずの成果を上げえたものと思う。帰路は案内者でもありジープの運転をお願いした林野庁の Anan 氏にすべてをまかせる。日本人3人はメコンを飲んだりマンゴスチンをほおぼったりしていただいだけであるが、8月30日バンコクに着いた時は一同完全にグロッキー状態であった。

Khao Luang 組はすでに次の調査地 Lang Sang 国立公園へ出発した後である。3日間のバンコクの休日も清水氏は石灰岩地帯の土壌分析に追われ、タイ国の苔類は100%採ったと豪語する北川氏は顕微鏡観察に余念がない。

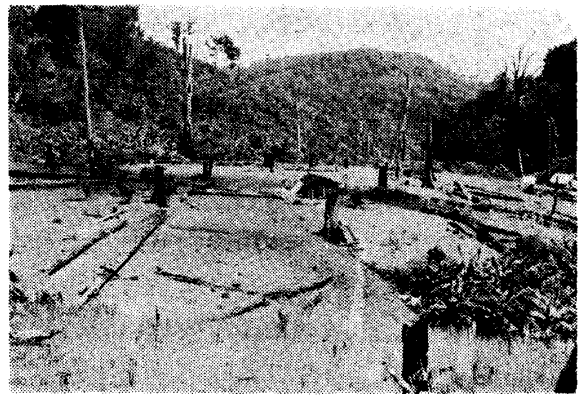


写真2 Phu Miang の焼畑。被害はまだ少ないが開墾は続けられている。

北部の調査は9月1日から6日まで平野先生他2名が Phu Kradung へ、残りの2人は汽車で Khun Tan へ向かう。9月3日 Khun Tan 駅で岩槻氏一行と合流し駅前広場で野営する。翌日はフタバガキ科の植物やチークの木などの優占する広葉落葉樹林の中を登る。この林は一度伐採されたのか樹木はまばらで見上げるような大木も散在するにすぎない。ヤンバルゴマ属 *Helicteres* spp. のような雑木は比較的よく茂っているが、草本類はきわめて少ない。落葉樹林帯における草本類の貧弱さは雨期乾期の別は特にないようである。やがてクリ属が現われ出すと落葉樹林は常緑樹を混生する混生林になる。混生林下では土壌もやや湿りけをおびてきて草本類や低木類も優勢になってくる。1000 m 付近の *Pinus merkusii* の松林の中に林野庁の宿舎がありここでお世話になる。

宿泊所の裏にはタイ国内では最高峰 Doi Inthanon にしか知られていなかった紅熟するソクズ *Sambucus javanica* subsp. *chinensis* が群生している。この subsp. *chinensis* はヒマラヤ西部から中国、フィリピン、台湾と日本にまで分布している。一方、黒熟するソクズ subsp. *javanica* はインドシナ半島からマレーシア、インドネシアに分布している。これら両亜種の境界がどこにあるのか疑

問であったが、今回の調査でタイ国北部に位置することが明らかになった。しかし、両亜種ともタイ北部に点々と分布していることから考えると単純な境界線で示されるものではない。

植物採集はたとえ同じ場所でも季節を変えて訪れる必要がある。このことは再度 Doi Suthep を訪れて改めて感じた。前回果実をつけていたものが今回花を咲かせていた。枯れていた着生シダは青々としている。しかし、*Viburnum cylindricum* やソクズのように花期が特になく年中開花結実しているような植物も多い。

採集の方法にも色々あるが車の利用は便利である。ゆっくり車を走らせながら花を見つけると飛び出してゆく。集めたものは車につめ込むから持ち運びの労はずいぶんはぶける。Doi Suthep や Mae Sariang などでの方法を使った。しかし、タイ人の運転は速度が速すぎて思うようにいかない。速度を下げてもらってもいつの間にか 60km, 80km と上がっている。やっと止まった時には 100m も後戻りしなければならぬこともしばしばある。直射日光の中を歩いたり車窓から虎視眈々獲物を狙っていると意外と疲れる。

楽しみにしていた国境沿いの山もいくつか登った。Doi Pha Hom Pok はビルマとの国境にある。麓の部落 Ban Mae Sao までは牛車にゆられて行く。右に左にと傾く時は思わず身が引き締まる。泥水の中を通ると牛の尾で泥水をふりかけられ決して乗心地の良いものではない。Ban Mae Sao に着いたのはやっと昼になったにすぎなかったが荷物を運ぶ馬が集まらず学校の廊下で 1 泊する。この電灯もない村で英語を話す婆さんに出会ったのには驚いた。麻薬のことを聞いたら誰がのみたいのかと言っていた。

翌日はかび臭いそうめんを食べ、うんざりするほど長いアプローチに行く。雨の上に荷

物を持たせた 8 頭の馬の通った後はひどいぬかるみである。この平坦な小道を 2 時間も歩くとやがて坂道となる。高度もぐんぐん増し、水筒の水もすぐ底をついてしまう。後は傘をつたわる雨水を集めて渴きをいやす。尾根道に出ると混生林は焼畑跡の荒地と化す。単調な荒地の中を行くと霧の中に薄気味悪い部落が現われる。下りて行くと馬が疲れたからここで泊るという。異国のこととて事情がわからず行程はいつも相手まかせである。翌日は 2 時間ほど進んだジャガイモ畑でテントを張ることになるのだから時間の浪費もはなはだしい。

2000m を越えるとジャガイモ畑はスゲやキケマン属などの群生している湿地が現われ、陵線を越えると美しい蘚苔林になる。山地民さえ入っていなければこの山も Doi Inthanon と同じようにおもしろかっただろうと思うと残念である。この後登った Doi Thung や Phu Miang でも、Doi Pha Hom Pok ほどひどくはなかったが、焼畑の被害をこおまわっていた。

山地民対策にはタイ国政府も頭を痛めているらしく、Tung Salaeng Luang 国立公園では軍隊まで出動して山地民の取締りに当たっている。この取締りはヘリコプターまで飛ばす大げさなものであるが成果のほうははかばかしくないようであった。Phu Miang で

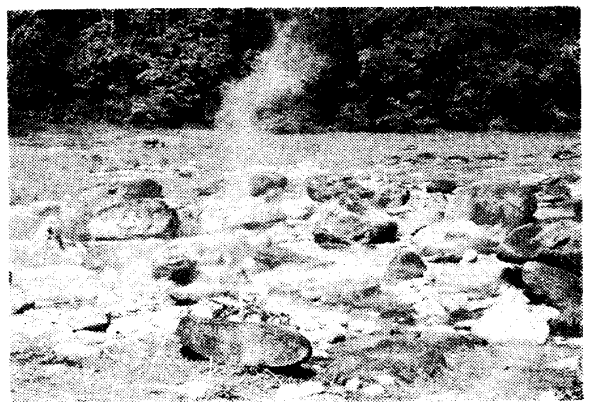


写真3 Fan 効外の温泉

も中腹の山地民の部落に大金を投じてコントロールを試みている。この部落には自家発電装置があり、各家庭には電灯がとまっている。また、立派な診療所もある。そのうえ、北欧から牛を輸入して牧畜を奨励している。このような力の入れ方にもかかわらず畑の作れそうな平坦地にはほとんど森林は残っていない。最高峯の Phu Lom Loh では一組の若い夫婦が開墾に精を出していたから、この山もまだまだ荒れていくことだろう。

このような荒廃した山巡りも Phu Miang を最後に終わる。1965年11月から1966年2月にかけての乾期と今回の1967年8月10日から10月11日にかけての雨期の調査によって基礎資料はある程度集め得た。しかし、広大な東北タイの地域には全く足を入れていない。季節的にも乾期の終りから雨期の初めにかけての調査が欠けている。

私達の資料とは別に、タイ国には林野庁所属の Forest Herbarium と農林省の標本庫を合わせて約10万点の標本が収められている。前者は Tem 氏や近年外国人によって集められた資料が、後者は Kerr らによって収集され Craib らによって研究された標本が中心である。Craib らは今世紀前半ですでに5万点の標本を基礎に仕事をしていたのである。したがって、彼らの研究を批判してゆくためにはまだまだ資料の集積が必要であり、そのためにはタイ国の研究者にたよらねばならないだろう。

さらに、標本を基にした仕事の上に立って熱帯における種の分化や移住の問題を含めて植物相を史的変遷の結果として解明するためには熱帯における植物の生活を理解することが必要である。このような観点から、従来のような短期間の観光旅行的調査方法には疑問がある。

マラヤにおける植物調査

岩 槻 邦 男

2カ月を越えるタイでの仕事を終えてマラヤへ移動してきた時、5人に減った一行はそれぞれに相当量の疲れを背負いこんでいた。10月11日、清水・布藤、岩槻の3人はバンコクから空路クアラルンプールに着き、空港でマラヤ大学の Stone 博士の出迎えを受ける。早速、シンガポール経由で届けられていた荷物の引取りのために税関へ行ったりしてから、夕方になってやっとマラヤ大学を訪ね、夜は Stone 夫妻と会食。翌12日朝、例のように荷物の山に埋まってペナンへ向かう汽車に乗り込む。一方、北川・福岡の両人は、11日夕方、大量の荷物と共にバンコク駅を立つ国際列車の客となって、26時間余の旅をする。そして、不案内な土地を右往左往してペナンで一行が落ち合って宿に着いたのは、12日の夜もずい分遅くなってからだった。

13日の午前中はゆっくり休息し、午後、ペナン植物園へ行く。ここはシンガポールと並んでイギリス植民地時代からの植物園で、Stone さんにも、ペナンの仕事についてはここでよく打ち合わせをしておくのがよいと示唆されていた。園長の Cheang Kok Choy 氏は2日後にはエジンバラへ出かけるということだったが、私どもの植物調査にも好意的